

「琵琶湖三次処理実験プラントの思い出」 書きかけです
島田 正夫

「10年ひとむかし」という言葉があるが、月日の経つのは早いもので、この話は三むかし以上まえのことになる。

昭和50年4月、学校を卒業して日本下水道事業団技術開発部（当時はまだ下水道事業センター試験所と呼ばれていた）に配属になり、最初の仕事が「琵琶湖三次処理実験」の担当であった。三次処理という言葉も今では使われなくなってしまったが、活性汚泥法による処理が二次処理で、その二次処理水を対象に更にグレードアップする処理が三次処理と呼ばれていた。滋賀県では琵琶湖の水質保全、富栄養化防止を図るため、流域下水道の整備が進められようとしており、その中核処理施設である浄化センターの高度処理に係る基礎データを得るための実験調査である。プラントは凝集沈澱＋砂ろ過法等からなり処理能力は500m³/日とかなり大規模なもので、琵琶湖湖畔にある大津市終末処理場敷地の一郭に設けられた。

私は何もわからないまま、技術開発部の先輩であった亀田泰武さんの指導の下で実験を担当することになった。プラントが完成したばかりの最初の頃は東京から月に1、2回のペースで寝袋持参して通い、亀田さんとプラントに泊まり込みで試験を行った。あるとき、24時間試験を行うための準備を進めていて、夕方水質分析試薬用の硫酸が品切れしていることに気付き、2人で大津市内の薬屋さんを捜し求めて何時間もアチコチ歩き回ったことが強く印象に残っている。結局「硫酸」は入手できなかった。

その後、実験プラントの専属スタッフとして京都市から水質専門職の久保田さんや市川さん、滋賀県から研修生というかたちで小山さん、今堀さん、田井中さん等が交替で見えられた。藤本さんというパートの女性事務員も加わり、常時4、5人の京都弁が飛び交うアットホームな雰囲気の中で実験調査が行われた。

実験プラントへはJR大津駅前からバスに乗って15分程度で行けたが、私はひとつ先の膳所駅から歩くのが好きだった。大津の町は空襲にあわなかったためか、歴史的な趣の古い街並みが多く残っており、閑静な住宅街を20分ほど歩いて通うのも琵琶湖三次処理実験プラント出張の楽しみの一つであった。

実験プラントの思い出としては数えきれないくらい沢山あるが、残念な思い出もある。プラントに泊り込みで昼夜試験を行っている時、夜中、プラントの高いところから北西の方向を見ると、遠く琵琶湖の対岸にまるでラスベガス（行ったことは無いが）のような一段と明るく輝くネオン街が見えた。それが有名な雄琴温泉トルコ街であることを後日知ったが、純真で気まじめだった私は、そのネオン街での楽しい夜の思い出を一度も残せなかった。今思えば一番残念でならない。

私は人事異動で他の部署に配置換えになるまで、約3年半琵琶湖の三次処理実験に携わったが、多くの人に出会いご指導頂き、いろんなことを学ぶことができたことは私の人生の一番の宝だと思っている。その後35年がたち、滋賀県の下水道整備も84%に達し、琵琶湖の水質保全に大きく貢献していると聞く。関西方面出張の際、新幹線で琵琶湖の近くを通るたびに、遠い昔のことがつい先日のように思い出される。